

## 1. 薬師寺地域にみる歴史的風致

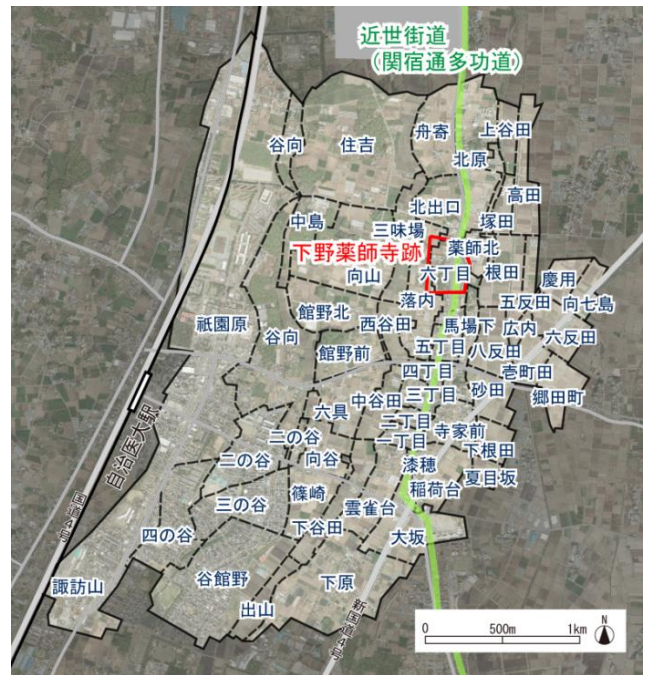
### (1) はじめに

薬師寺地域は、本市の南河内地区の北西部にあり、東部の田川沿岸低地と西部の宝木台地からなる。宝木台地は南に向かって傾斜しており、西の祇園原地域と東の薬師寺地域の間には浅い谷が入る。そして古代には東山道、中世から近世には関宿通多功道せきやどおり た こうどうや日光街道が整備され、台地上には街道に沿って集落、畑地、平地林等が分布し、台地の東西には水田が広がっていた。

下野薬師寺は下野朝臣古朝呂の一族が創建したとされ、その後国が管理する官寺に昇格し、天平宝字5年（761）には正式に僧の資格を与える日本三戒壇のひとつとなり、東国仏教の中心として隆盛を極めた。その後衰退したが、鎌倉時代に一時復興し、南北朝時代に寺号を安国寺と改めた後、元龜2年（1571）兵火により堂宇が焼失した。江戸時代前期に本堂が再建され、また戒壇があったと伝えられる場所に釈迦堂が建てられ、修理や再建を経て現在の六角堂に至る。なお、大正10年（1921）下野薬師寺跡として国指定の史跡となり、その寺域の一部が整備、公開されている。

下野薬師寺跡周辺に所在する薬師寺、龍興寺、薬師寺八幡宮はこの地域の檀那寺、氏神として人々に信仰され、花まつりや天王様、大般若会等の祭礼によって現在も下野薬師寺の信仰が伝えられている。また、これらの祭礼は地域住民の交流の場となり、社会的共同体の形成や維持に大きく影響している。

以上のように薬師寺地域は、古代の東国における仏教の拠点となった下野薬師寺創建の地であり、その信仰を受け継ぐ社寺とその社寺を中心にして行われている祭礼や伝統行事が地域に住む人々の生活に溶け込んでいるといえる。



薬師寺地域（大字薬師寺）と字名称



薬師寺地域俯瞰写真

<南河内町『南河内町史 民俗編（第六巻）』,1995,巻頭カラー写真3>

## (2) 下野薬師寺の沿革

### 1) 創建

天武天皇の発願とされる下野薬師寺の創建年代は諸説あるが、発掘調査で出土した7世紀末頃に用いられた可能性のある最も古い軒瓦の形式、その他の関連史料などから7世紀後半から8世紀初頭と考えられる。その創建には当時中央政界で活躍し、下野国河内郡出身の下毛野朝臣古麻呂が深く関わったとされる。発掘調査などから、下野薬師寺の創建時の伽藍は、南に中門、北に金堂を配して回廊でつなぎ、その内側の南側中心に塔、塔の北側の回廊内に東西に基壇建物を配する特徴的なものであったことが判明した。各建物は創建から官寺への昇格（722年頃）までに、金堂、塔、東側基壇建物、西側基壇建物の順に建てられたと考えられている。

### 2) 官寺への昇格

下野薬師寺が官寺であったことがわかる最古の資料は天平5年（733）『<sup>うきょうけいちょう</sup>右京計帳』である。一方、発掘調査で出土した瓦等からみると、官寺への昇格は8世紀前半とされ、その他の文献等史料から、下野薬師寺は官寺としての整備が進められるとともに、東国における他の寺院の新造や整備など、東国における仏教全般を統括する役割を持っていたと考えられている。官寺への昇格時、西側基壇建物は建設途中であり、昇格に伴い整備が進められ、併せて金堂の改築、講堂の新築が行われ、さらに750年頃までに南門と寺院地区画施設である掘立柱塀が建てられたことが発掘調査から判明している。

官寺化に関する史料

史料名称	内容
右京計帳	天平5年（733）の平城京右京計帳手実に、右京三条三坊に本籍のあった戸主於伊美吉子首が、「下野薬師寺造司工」として下野薬師寺に赴任中であることが記されている。
駿河国正税帳	天平10年（738）に駿河国を通過する公使に供給するための正税の用途を記したもので、「下野国造薬師寺司」として僧侶宗蔵等12名の一行が通過し、食料を国衙より支給したことが記されている。
続日本記	天平勝宝元年（749）7月乙巳の条に、天平17年（745）に墾田永年私財法が施行されたことを受け、平城京の諸大寺をはじめとする寺院に対し、所有できる墾田の制限を定めているが、下野薬師寺は法隆寺、四天王寺など中央諸大寺と並ぶ500町の墾田が許されている。

### 3) 戒壇の設置

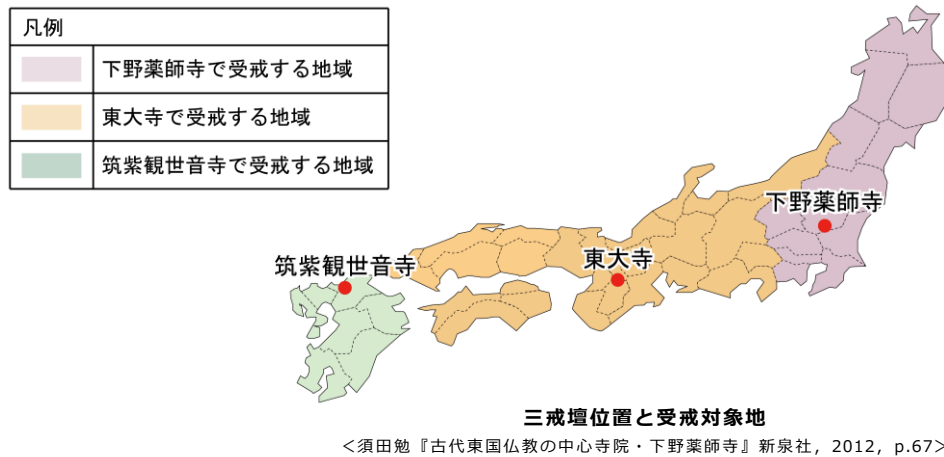
大宝元年（701）の大宝律令以後8世紀前半に中央政府は、仏教に厳しい統制を加え、天平勝宝6年（745）に来日した鑑真が東大寺に戒壇院を設置したほか、戒律<sup>※1</sup>を授ける環境整備を進めた。そして天平宝字5年（761）淳仁天皇の勅により、東大寺の他に、西海道の筑紫観世音寺とともに、東国の受戒<sup>※2</sup>の場として下野薬師寺に戒壇が置かれることとなった。これによって下野薬師寺は、東国仏教の中心としての重要性をますます高め、隆盛を極めたことがわかる。



下野薬師寺推定復元CG

※1 戒律：仏教で修行者や僧団が守らなければならない規律。

※2 受戒：信者・出家が戒を受けること。



#### 4) 復興と衰退

下野薬師寺では平安時代以降、受戒を行える僧が不足し、また律令体制の崩壊とともに寺院が衰退したとされる。9世紀中頃、創建時に建立された塔が焼失し、寺院地の東部に場所を移して再建され、伽藍が変化した。その後再建された塔も火災により焼失し、再建されずに放置されたと考えられる。寺院地区画施設としては、最初に板葺掘立柱塀が設けられ、後に瓦葺に改変された。その後は塀が溝になり、10世紀後半から11世紀ごろに大溝が掘削されたと考えられている。そして寛治6年(1092)下野薬師寺の住僧慶順が、下野薬師寺は東大寺の末寺であり、寺が近年荒廃している現状を述べ、復興を求めたことが8世紀から19世紀の文書群である『東大寺文書』中の「東大寺注進状」弘安8年(1285)に記されている。しかし、東大寺が下野薬師寺に援助を行った形跡はなく、下野薬師寺は歴史の表舞台から姿を消していった。その後、元禄14年(1701)『招提千歳伝記』の「下野州薬師寺中興密厳律師伝」によると、慈猛が下野薬師寺の戒壇を再興したと記されている。慈猛は、建長～建治年間(1249～1277)の約20年間、下野薬師寺を拠点に真言密教などの教学に努めたとされる。

#### 5) 下野薬師寺から安国寺へ

南北朝時代になり、足利尊氏・直義が討幕の戦による戦死者等を弔うため、全国に安国寺を設置することとなった。その多くはすでに創建されていた寺院を安国寺と改称したもので、下野国では、暦応2年(1339)に下野薬師寺を安国寺に改称したと記されている。『薬師寺縁起』によると、元亀2年(1571)、後北条氏と結城・多賀谷氏等連合軍との戦いにより伽藍が全焼したと伝えられ、焼失した堂塔は、「薬師堂等之七堂、戒壇堂、日光堂、護摩堂、講堂、礼堂、舍利堂、御影堂、阿弥陀堂、鎮守稻荷・清瀧・八幡・天照・熊野・天神・毘沙門・鷲宮・天王・住吉・斎宮、所化之寮庵数軒、坊中鐘楼堂、経蔵、宝蔵、五重宝塔、回廊、四門、門前六口寺院」とされる。

元禄元年(1688)に編集された『下野風土記』には、当時の下野薬師寺を大伽藍とはかけ離れた、本堂と戒壇堂のみが建つ荒廃した寺であったと記されている。その後、下野薬師寺の由緒に連なる安国寺と龍興寺がそれぞれ独立して再建を進めた。なお、安国寺に残る棟札には、宝暦年間(1751～1764)における修理の記載があり、薬師寺村を含む周辺の村々の大工の名前が記されている。

江戸時代に入って秋田藩領となり、安国寺は10石の寺領を受け、佐竹氏家臣の渋江内膳の寄進により戒壇(現在の六角堂)と薬師堂が造営された。

6) 近代以降

安国寺本堂は明治時代末に本堂が再建され、現在に至る。そして、大正10年(1921)3月3日、下野薬師寺跡として国指定の史跡となった。昭和40年度(1965)の栃木県による発掘調査開始以降、国士舘大学考古学研究室や地元住民の協力を受けながら、南河内町教育委員会、下野市教育委員会に発掘調査が引き継がれ、成果を上げてきた。そして現在は、史跡の一部が整備され、史跡下野薬師寺跡ふるさと歴史の広場として公開・活用されている。なお、平成30年(2018)7月、安国寺が薬師寺と再び改称された(以下、薬師寺という。)

(3) 下野薬師寺跡を取り巻く歴史的環境

下野薬師寺跡周辺には、寺院創建以前の古墳時代から集落が形成されていた。下野薬師寺が創建され、そして中世には小山氏から分かれた薬師寺氏により薬師寺城が築城された。近世以降は、下野薬師寺は安国寺や龍興寺となり、日光街道わきおうかんの脇往還として関宿通多功道等が整備され、それらを取り巻く形で集落が形成されていった。

このように下野薬師寺周辺の歴史的環境は、中世、近世、近代の寺院の変遷や衰退、復興を経験しながら、古墳時代や寺院が創建された古代の空間構造をもとに形成されてきたといえる。

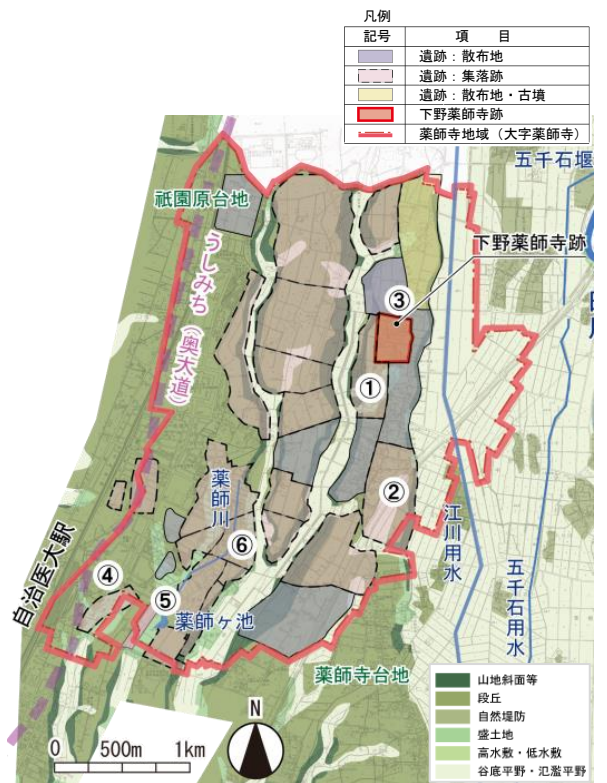
1) 古代

下野薬師寺周辺には寺の建立・改修・維持等の寺院を支えていたと考えられている集落が存在し、これまでに、おうちいせき落内遺跡<sup>①</sup>※・やくしじみなみいせき薬師寺南遺跡<sup>②</sup>等で発掘調査が実施されている。なお、寺院創建以前の古墳時代の遺跡として、北方には首長墓と考えられている前方後円墳おわしやまの御鷲山古墳<sup>③</sup>をはじめとした古墳群が存在する。

2) 中世

中世になると、鎌倉から奥州に向かう奥大道おくだいどうをはじめとする街道が整備され、街道に近接して城館が造られた。古代に比べ小規模ではあるものの、集落も確認されている。

竪穴遺構は、諏訪山北遺跡<sup>④</sup>のように「うしみち」に沿って側溝や区画溝が巡り、竪穴遺構・井戸・土坑・掘立柱建物などの遺構群が存在する下古館遺跡類似の遺跡と、烏森遺跡<sup>⑤</sup>、三ノ谷東遺跡<sup>⑥</sup>のように竪穴遺構が単独あるいは単独に近い状態で確認される遺跡との二者が存在することが明らかである。また、諏訪山遺跡の城館と推定される区画溝の内部でも竪穴遺構が確認されており、これを含めれば竪穴遺構については三様のあり方が認められるということになる。いずれにしても、発掘調査結果より、中世においても下野薬師寺周辺には集落が広がっていたことが明らかである。



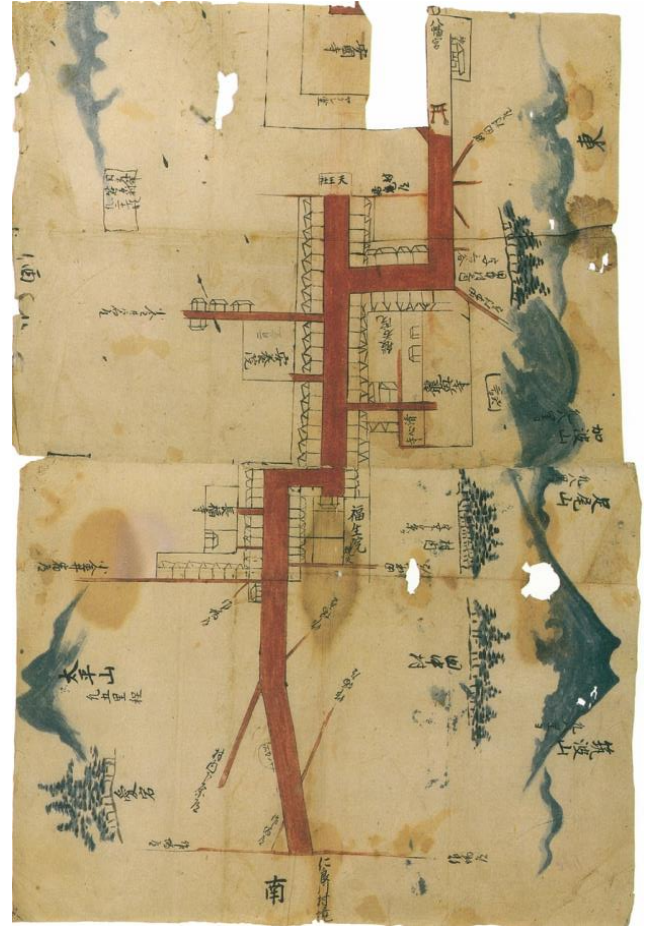
古代・中世の歴史的環境

※：図中で本文1), 2)の①~⑥の位置を示す。

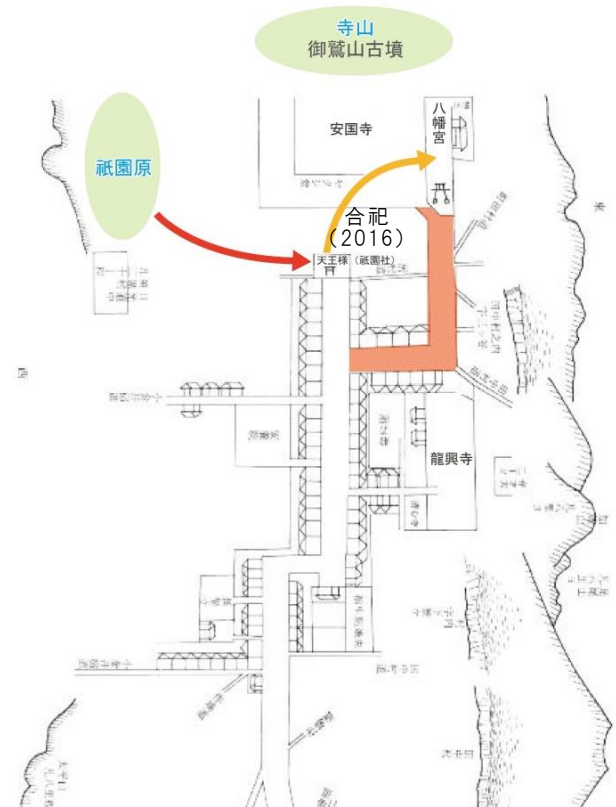
3) 近世

江戸時代になると、日光街道と街道沿いの松並木が整備され、秋田藩佐竹氏の下野領となった薬師寺村を通過していた宇都宮大道と呼ばれた結城から宇都宮を結ぶ街道が、日光街道の脇往還である関宿通多功道として整備された。それに伴い、薬師寺村の街道沿いの地域は町割がなされた。民家のうち、商家は南北方向に通る街道に面して主屋を配するが、多くは主屋を南面させる農家形式の屋敷構えとしている。当時の主な生業は農業で、街道からは主屋の屋根の妻面が並ぶ景観が広がっていた。また集落背後に広がる水田の景観は、近世に入り、江川用水や田川から取水する五千石用水などが開削されたことにより形成されたといえる。

嘉永元年(1848)『野口一雄家文書』の「下野国河内郡薬師寺村明細帳」によると、当時の薬師寺村は、家数 134、人数 596、馬 54 匹で構成され、畑作中心の農業のほか、女性による機織りが行われていた。さらに職名として、鍛冶屋、大工をはじめ、小酒屋、宿屋、豆腐屋など、多彩な商店、職人が集まり、薬師寺は村であったがその規模や性格は「町」のようであったことがうかがえる。そして「薬師寺村町区割絵図」では、安国寺、龍興寺、薬師寺八幡宮を含む社寺が 10 か所以上確認でき、薬師寺本村から安国寺の北に位置する御鷲山古墳の辺りの寺山と呼ばれる地域に向かう道は、現在の史跡指定地、すなわち往時の寺地の南端で東に右折し、寺地の東縁に沿って北上するよう敷設されていた。また、寺院の南正面の人の視線を受け止める位置に八坂神社が置かれるなど、近世においても下野薬師寺からの由緒をもつ安国寺の空間的な重要性が街道計画や集落の空間構造にも影響していたと考えられている。



薬師寺村町区割絵図(年不詳・近世・個人蔵)



薬師寺村町区割絵図解説図

#### 4) 近代以降

明治初年頃の道路改修にともない、前述のクランク状の道路が直線的に整備され、その後、薬師寺集落および下野薬師寺跡の史跡指定地の中央を通過する県道結城石橋線が建設された。



下野薬師寺跡（南より）

<須田勉『古代東国仏教の中心寺院・下野薬師寺』, 2012, p.5>に  
県道結城石橋線・薬師寺の位置を加筆

#### (4) 下野薬師寺に関連する歴史的建造物

##### 1) 信仰を伝える社寺等

##### ① 薬師寺

醫王山薬師寺いおうざんと称する真言宗智山派しんごんしゅうちさんぱの寺であり、本尊は薬師如来で御開帳は33年に一度である。境内には、本堂とその西に庫裏、南に山門、また北西80mほどのところに六角堂が建つ。境内にはその他、十三重の塔やマニ車、石仏群等がみられる。

暦応2年(1339)に下野薬師寺を安国寺に改称したもので、『薬師寺縁起』によると、元亀2年(1571)、後北条氏と結城・多賀谷氏等連合軍との戦いにより伽藍が全焼したと伝えられる。

なお、平成30年(2018)7月、再び薬師寺に名称が変更された。

##### ①-1 本堂

現在の本堂は、明治38年(1905)に建てられたもので、桁行6間・梁間5間半の入母屋造平入、亜鉛鉄板葺である。平成30年(2018)に庫裏、山門とともに修理を行い、本堂は屋根の葺替及び軸部下部の部分修理を行った。



薬師寺本堂



薬師寺本堂（修理前）

##### ①-2 山門

薬師寺に現存する建造物で最も古いといわれ、詳細な建築年代は不明であるが建築の様式などから、江戸時代後期と考えられている。三間の薬医門で、両脇に半間ほどの脇扉を設け、壁部分は腰板とその上部は漆喰とする。木部の一部に彩色が残る。門部分の屋根は棧瓦葺とし、脇扉は銅板葺とする。上記のように平成30年(2018)、屋根葺替及び柱の脚部の修繕、基礎部分のコンクリートを石敷とするなどの部分修理を行った。



薬師寺山門



薬師寺山門（修理前）

①-3 六角堂：市指定文化財

この建物は、古代下野薬師寺に設けられた戒壇院の跡地とされる場所に建てたと伝えられている。江戸時代には釈迦堂と呼ばれていたことが、文化2年（1805）『木曾路名所図会』の安国寺境内の挿絵に確認される。この釈迦堂は江戸初期の絵図にも描かれ、その位置も本堂（薬師堂）の北西であるが切妻造の建物として描かれている。現存する建物は、彫刻や建築様式から江戸時代後期と考えられ、『木曾路名所図会』に描かれた釈迦堂が現在の六角堂である可能性が高い。

現存する六角堂は、一辺 11 尺弱の正六角形平面で南面して建つ。屋根は方形造で、大正時代の古写真では茅葺であったが、昭和 57 年（1982）に銅板葺に改められ、その際小屋組や軒先が、改変された。彫刻などの装飾は上部に集中し、軒支輪や軒天井には波や雲をあしらった浮彫彫刻が、外回りや中央部の貫などには絵様が施されている。これらはほとんどが素木であるが、柱上部を中心に部分的に鮮やかな彩色がみられる。この彩色は明らかに後のもので、天井や堂内上部の彩色も同様である。現在は前半分を吹き放ち、後半分を堂内とするが、堂内の中央には、鑑真和上の絵図を収めた厨子<sup>ずし</sup>が安置され、両脇には木造の不動明王立像<sup>ふどうみょうおうりつぞう</sup>、韋駄天立像<sup>いだてんりつぞう</sup>等が祀られている。なお、前面の犬走部分は玉石の洗出しとなっているが近年の整備によるものである。

毎年4月に行われる花まつりの際には、前面に幔幕<sup>かんぶつえ</sup>が張られて花御堂がしつらえられ、灌仏会の舞台となる。



六角堂



薬師寺戒壇趾（茅葺の六角堂、大正時代）

<栃木縣『栃木縣史蹟名勝天然記念物調査報告 第一輯』1926>

## ② 龍興寺

下野薬師寺の南方に位置し、同寺の別院とされている。寺伝では奈良時代の天平宝字5年(761)、鑑真が唐の龍興寺の舎那殿壇の法を移し祥雲山龍興寺として開基したとされる。江戸時代には、安国寺との間で天和元年(1681)から享保4年(1719)にかけて薬師寺の正統を争う訴訟を起こし、議論の末、天保9年(1838)に「安国寺は戒壇、龍興寺は鑑真墓所を守護する」という合意に達し現在に至っている。



龍興寺本堂

現存する本堂は、関連史料である「本堂再建上等儀式諸記録」より万延元年(安政7年、1860)に上棟された。平成7年(1995)に刊行された『南河内町史(民俗編)』では「寄棟・棧瓦葺の比較的素朴な建物であるが、向拝の木鼻や水引虹梁、及びその上下には幕末らしい繊細な素木の装飾彫刻が施されている。」と報告され、掲載写真から向拝は緇破風となっているが、町史刊行後に一部改変され、現状は寄棟造本瓦葺、向拝部分を唐破風としている。なお、境内には道鏡の墓と伝わる円墳や鑑真和尚碑がある。

## ③ 薬師寺八幡宮：県指定文化財

薬師寺字馬場、通称旭ヶ丘に鎮座する八幡宮は一般に八幡様と呼ばれ、薬師寺をはじめ町田、田中など広い氏子圏を有する神社である。貞観17年(875)創建と伝えられ主祭神は菅田別命で、配神として玉依比売命と息長帯比売命の二神が祀られている。一説には下野薬師寺の守護神・仏法の鎮守神として鎮座したとも伝わり、清和天皇により創建された源氏の氏神としての伝承や、日本三戒壇「下野薬師寺」の守護神として鎮座したという伝承が、伝え継がれている古社である。旧村社らしく長い参道と広い境内を有し、社殿の周りには神楽殿のほか、祖霊社、八坂神社、千勝神社、天満宮、猿田彦神社、天照皇大神宮、豊受大神宮、熊野神社など数多くの境内社がある。



薬師寺八幡宮拝殿

本殿は一間社流造、銅板葺で、全体に装飾も少なく彩色も控えめである。この地を支配していた佐竹氏による再建と伝えられ、棟札より寛文2年(1662)に建てられたものとされる。拝殿は、本殿建築の翌年に玉垣とともに建てられたと伝えられ、桁行5間・梁間3間入母屋造、銅板葺で木部および彫刻にはすべて彩色がみられる。

なお、現在の社殿は、平成14年(2002)度に部分修理が行なわれた。



## 2) 薬師寺地域にみる建造物

## ① 雷電神社

この地域の鎮守である薬師寺八幡宮の参道入口の東側に所在する神社で、祭神は別わけ雷かづち大神のおおかみである。伝承によれば、災害に苦しんでいた村人を雷神が天狗に姿をかえ助けたと伝えられている。

境内には社殿建設の経緯に関する石碑が設置されており、それによると社殿は、昭和44年(1969)の建築である。本殿は一間社流造で、彫刻などの装飾がほとんどみられない非常に簡素な建物である。拝殿は桁行3間・梁間2間の入母屋造平入垂鉛鉄板葺で、屋根前面には向拝は設けず千鳥破風をのせる。



雷電神社拝殿

## ② 地藏山

地藏山さんまいじょうは三味場(ため池)の西側に隣接する山林で、石造の地藏菩薩坐像があることから地藏山と呼ばれている。この地藏は12世紀にまとめられた『今昔物語集卷17下野国僧衣地藏助知死期語第30』に記述されている地藏菩薩坐像と伝えられている。

現在の地藏は延宝6年(1678)の刻銘があることから、後に再建されたものとされ、地藏山には五輪塔の破片が散乱していることから、中世以降は墓地として利用されていたと考えられている。現在は地元住民の生活空間の一部として、地藏信仰の活動や地藏とそれを取り巻く山林である地藏山の維持管理が龍興寺を中心に行われている。



地藏菩薩坐像

(5) 祭礼および伝統行事

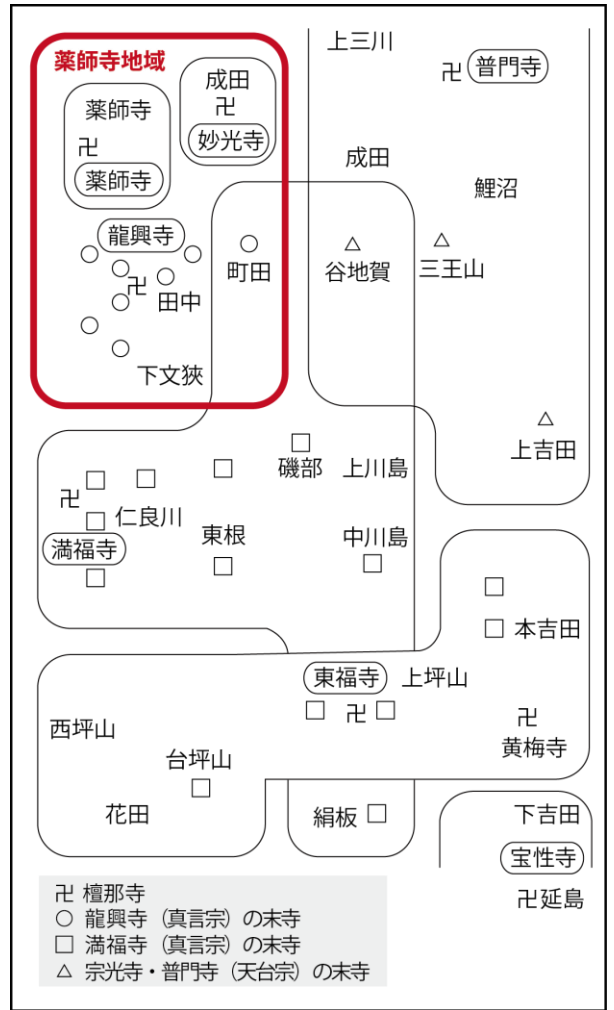
南河内地区では、地域ごとに寺院の檀家となっている場合が多い。それは、檀那寺である本寺が地域ごとに末寺を設けて檀家と本寺を手次させたためである。

薬師寺・龍興寺は下野薬師寺の信仰を伝える檀那寺（本寺）で、いずれも薬師寺地域（大字薬師寺）の住民を中心に檀家に持つ寺院である。薬師寺は、古代東国の仏教の中心として国家の安全や現世利益などを祈った官寺としての役割の多くを引き継いで存続したため、檀家は限られている。一方で龍興寺は、死者の供養を目的に造られた中世の板碑※が出土していることなどから、古くから葬儀等を行い、薬師寺地域の住民と深く関わりを持つ檀家の多い寺院である。

神社に関しては、薬師寺五丁目に所在する八幡宮が氏神として薬師寺地域の人々に信仰されている。

以降、薬師寺地域の代表的な祭礼と伝統行事を紹介する。

※板碑：中世に造られた板状の供養塔で主に関東地方に多く分布し、青石塔婆、板石塔婆とも呼ばれている。



南河内地区の寺院と檀家の分布

<南河内町『南河内町史 民俗編（第六巻）』,19951,p.1066> に加筆

薬師寺地域の祭礼と伝統行事

	薬師寺(安国寺)	龍興寺	薬師寺八幡宮	雷電神社
1月	1日:年越し法要(31日~)	3日:新春大護摩供		
2月		15日:釈尊涅槃会	11日:祈年祭	
3月		12日:二月堂お水取り (龍興寺~二月堂)		
4月		7日:道教禪師御遠忌 8日:釈尊降誕会		27日:祈年祭
5月	4日:花まつり			
6月				
7月		28日:大般若会	第2・3日曜日:祇園祭 (天王様) 31日:大払式	
8月	10日:施餓鬼会	8日:大施餓鬼会 13~16日:孟蘭盆会		
9月				
10月				
11月			2~3日:例祭 24日:新嘗祭	17日:新嘗祭
12月	31日:年越し法要(~1日)	31日:除夜鐘		

1) 薬師寺（旧安国寺）の花まつり

花まつりは、<sup>ごうたんえ</sup>降誕会と呼ばれる法要を指す。本来は釈迦の誕生日である4月8日に行うものであるが、現在は祝日である5月4日に開催している。

天正2年（1574）において、安国寺の僧晃栄が記した『<sup>やくしじえんぎ</sup>薬師寺縁起』に、「毎年4月8日、戒壇堂に於て釈迦如来を開帳せしめ、近里の貴賤、遠国の僧俗、参詣群集して市を成すものなり」という記載があり、この頃には既に花まつりが行われていたことがわかっている。加えて、『嘉永二年（1849）4月薬師寺村明細帳控帳写』にも「一灌仏会毎年四月八日 右同断御出役御座候」の記載がみられ、花まつりの継続性が確認できる。

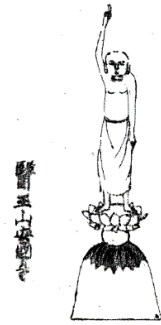
花まつりでは、つつじの花で屋根を飾る<sup>はなみ</sup>花御堂（釈迦が誕生した場所が美しい花園（ルンビニ園）であったことに由来する）をつくり、誕生仏（生まれた姿の釈迦の像）に、<sup>あまぢや</sup>甘茶（秋に摘んだアジサイ科の植物の葉を乾燥させて煎じたもの）をかけ（灌仏）、釈迦の誕生を祝う法要が行われている。

檀家には甘茶と<sup>たけのこ</sup>筍の煮物が振る舞われる。檀家は奉納品として、米・菓子・酒などを供え、お返しとして、寺に伝わる「エンブダゴンシャカブツ」の姿が彫られた版木の写しを重箱に入れて持ち帰る。



誕生仏

開河全盤地地



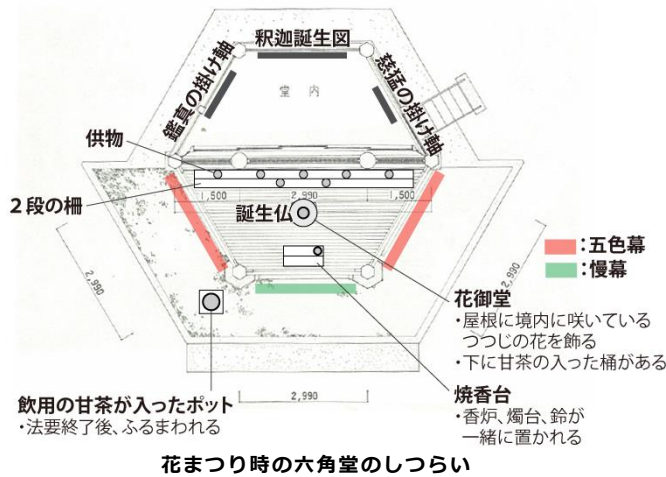
版木の写し



花まつり当日の六角堂



誕生仏に甘茶をかける参加者（灌仏）



## 2) 龍興寺の大般若会

龍興寺の大般若会は、家内安全、息災延命、五穀豊穰、諸願成就の祈願法要であり、7月28日に実施される。檀家役員の20～30人程度が参加し、本堂にて仏の知恵について説いた大般若経と呼ばれる600巻の経典を読む行事である。また、寺の大きな行事のひとつであるため、近隣の真言宗の寺の僧（薬師寺、満福寺）が手伝いとして参加する。

龍興寺で使用する大般若経は、檀家によって法要が行われる時期に寄進や修復を受けたものであることが経典の表紙の内側に記録されており、そのひとつには、「嘉永七季歳次甲寅夏六月 此経三百巻修復（寄進者）」との記載があり、少なくとも江戸時代後期には檀家によって経典が寄進されて大般若会が実施されていたことがわかる。

法要の主宰者である導師が本堂の中心に座り、<sup>しきしゅう</sup>職衆と呼ばれる僧12人がその左右に座り、600巻ある大般若経を12箱（50巻を一箱）に納めたものを読み上げ行う法要であるが、現在は5人で行っている。

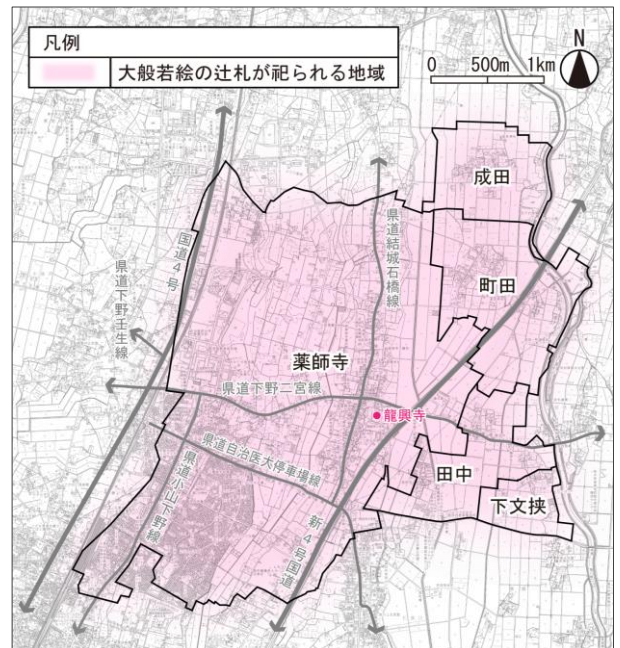
経典を読む際には、折り本状になった経典の表裏の表紙を両方の手で支え、右または左に傾けながら本文の紙をばらばらと一方へ落とすように動かして経題や経典の初・中・終の数行だけを略読する「転読」という読み方を用いる。この転読を中心とし、これに導師による法要の趣旨や経典の解釈、仏への諸願成就の祈願などが加わり、法要が構成されている。

職衆は導師の下で位階や力量に応じた進行役、随伴役など種々の役割を分担している。それぞれの諸役を果たすことにより、導師の統率に基づいた法要が執行され、大般若会の宗教的趣旨が具体化される。

法要が終了すると、参加者に大般若経の札が配られる。札は各地域の檀家数より1枚多く配られることになっている。この1枚は、辻札と呼ばれ、世の中の全ての人々が幸せに暮らせるように、また地域に住む人々に事故や病気が起こらず、安心して生活できるように願いを込めて地域の代表役員が道境に立てている。また、法要の後には寺の講堂で役員総会が行われ、一年間の収支報告や寺の諸行事などを話し合う。



檀家居住域の道境に祀られた辻札



大般若絵の辻札が祀られる地域

3) 薬師寺八幡宮の天王様 てんのうさま

薬師寺地域における天王信仰に基づく祭礼は祇園祭ぎおんまつりと呼ばれ、旧薬師寺村の旧道を中心としたルートで神輿が渡御し、地域が一体となって盛り上がる。各町で旗を挙げ、会所祭を行う際に神輿を下ろす場所には、注連縄を巡らせた竹しめなわを四方に設置する。

祭礼時は地域全体にお囃子と神輿の掛け声が鳴り響き、夜になると神輿とお囃子屋台の灯りが加わり、周辺地域全体が祭りの雰囲気包まれる。

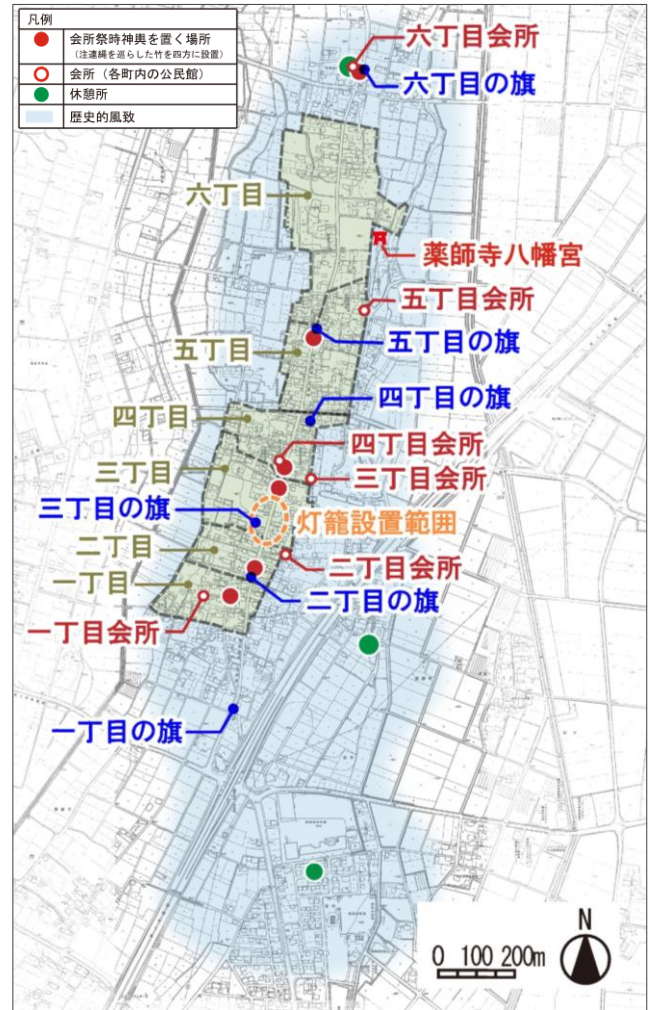
※「3. 天王様にみる歴史的風致」に詳述



遷宮前の祭礼時の八坂神社



祭礼時の夜間の様子



薬師寺八幡宮の天王様しつらい図

(※神輿ルート図は2章「天王様にみる歴史的風致」に記載)

#### 4) 薬師寺八幡宮のおおばらしきの大祓式

薬師寺八幡宮において、7月31日の夜に行われる大祓式（千灯万灯祭）は、茅の輪をくぐり、夏の穢れを払う祭りである。

起源は明らかではないが、総代に宛てた昭和30年代の大祓式の開催案内が残っていることから、少なくともこの頃には実施されていたことが判明している。なお、町史編さん時点（平成6、7年頃）は休止していたが、その後再開した行事である。

神社の境内に参加者が集まり、社務所前で神事に使用する祓い串や形代が配付される。祓い串は神事に使用するため、個人がそのまま所持するが、形代は自分の身代わりとし、息を吹きかけて穢れを託した後、職員に渡す。その後、八幡宮拝殿前に設置された茅の輪の前に2列に並び、神事が始まるのを待つ。

神事が始まると、始めに宮司による祝詞の奉納、お祓いが行われる。その後、参加者が祓い串を体の前で一度振り、宮司を先頭にして祓言葉（かたしろ）を唱えながら八の字を描くように茅の輪をくぐる。

茅の輪くぐり終了後、氏子総代が大きな幣束を持ち、「千度申す、万度申す」と唱えながら左回りに八幡宮と八坂神社の周りを三周し、神事が終了する。

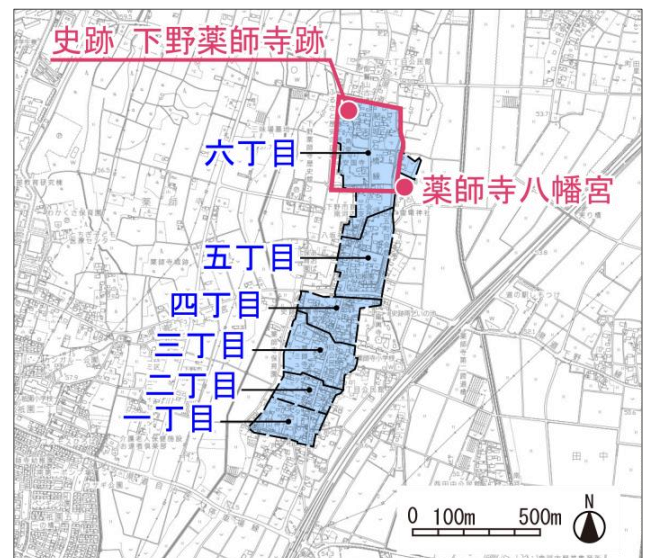
なお、神事終了後は直会が始まる。これは当月に行われた祇園祭の慰労会も兼ねている。



大祓式での茅の輪くぐり



祓い串を持ち帰る参加者



大祓式への参加者の主な居住範囲

5) 雷電神社の祈年祭および新嘗祭

祈年祭（4月27日）は春の耕作始めにあたり、風雨順調で農作物がたくさん収穫できるように、また一年間平穏無事に過ごすことができるようにと祈願する祭礼で、稲や穀物の実りを願うことから、としごいのまつりとも呼ばれている。

また、雷電神社では、祈年祭と相対する秋に豊作を感謝する祭礼の新嘗祭（11月17日）も実施されている。新嘗祭は、古くは陰暦の11月卯の日に行われたが、近年は11月23日に行う神社が

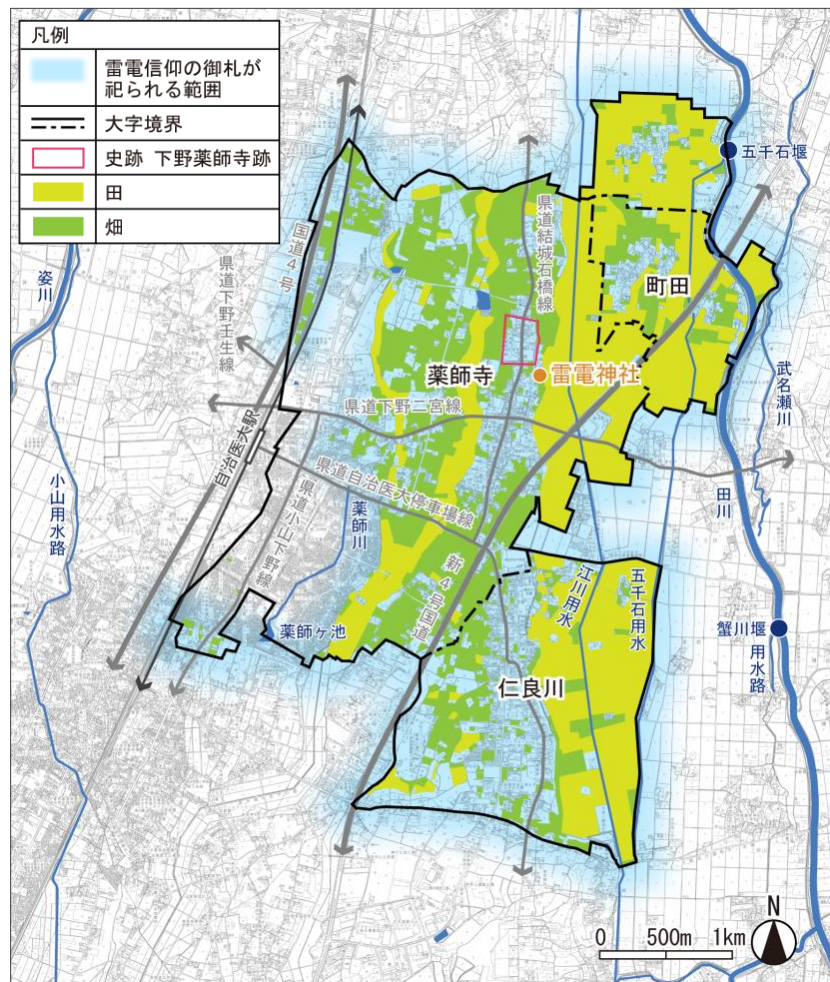
多い。全国の神社で行われている祭礼で、時期は異なるが、どちらも農耕に関する祭礼であり、雷電神社では同様の神事が執り行われている。

雷電神社における祈年祭と新嘗祭の起源は明らかではないが、総代に宛てた昭和30年代のそれぞれの祭礼の開催案内が残っていることから、少なくともこの頃には実施されていたことが判明している。

祈年祭と新嘗祭の神事は、午前中に行われ、氏子地域を代表する総代が参加する。雷電神社において、宮司による祝詞奏上や祈祷が執り行われ、神事は終了する。神事終了後、総代は札を受けて、落雷によって地域に被害が起きないように各町内の公民館または田畑などに飾る。



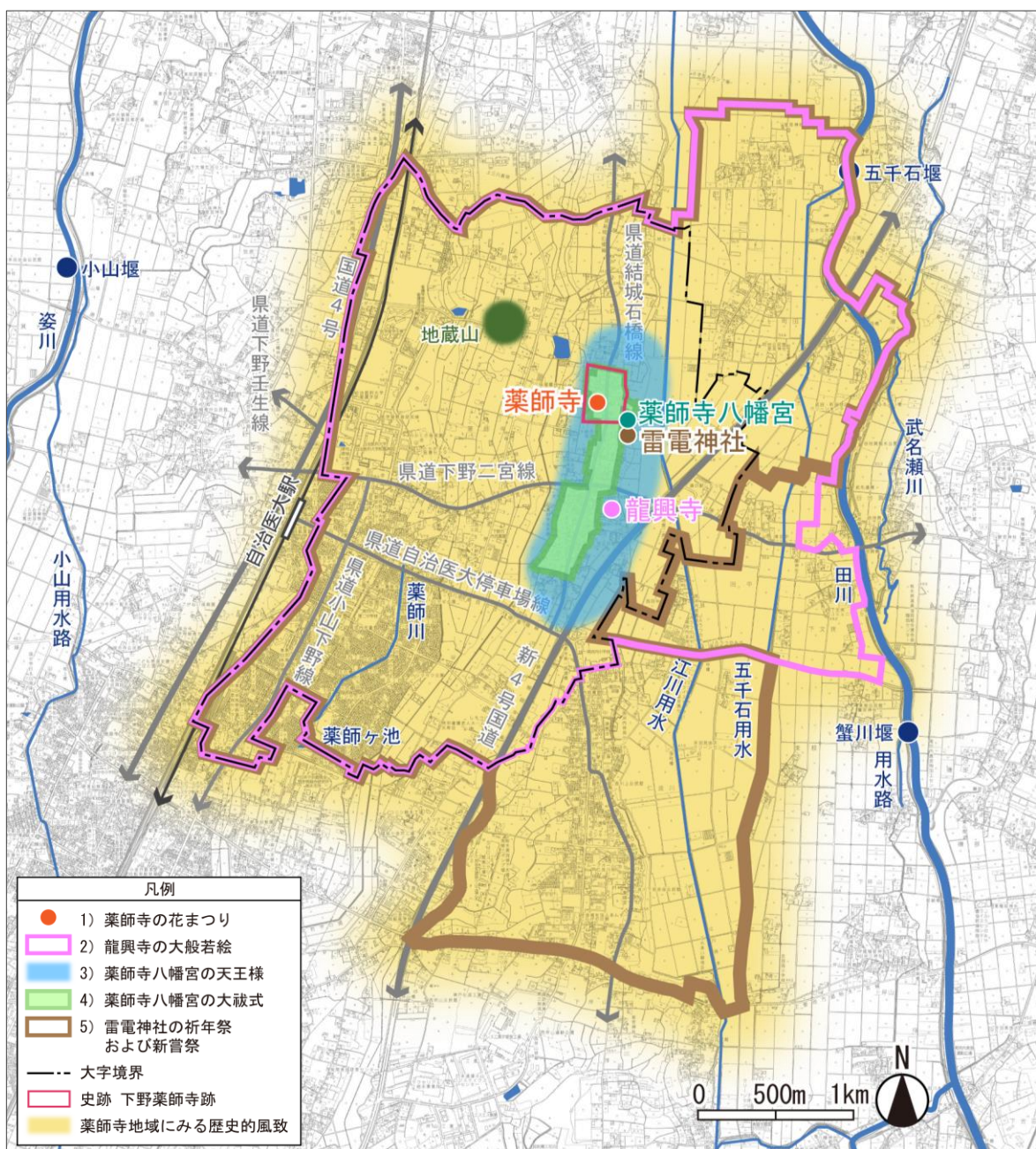
水田に祀られた雷電信仰のお札



雷電信仰のお札が祀られる範囲と田畑の分布

(6) まとめ

下野薬師寺は創建以来、東国仏教の中心的役割を担い、官寺となり戒壇が設置されるなど隆盛を極めた。寺院の創建以前から存在していた周辺の集落は、寺院創建時から建設にかかわり、その後も寺院を支えるなど下野薬師寺と密接な関係にあったと考えられている。中世には下野薬師寺は安国寺と寺院の名称が変わり、また近世にかけては街道や水利施設等の整備によって生業等が発展し、周辺の集落と寺院との関係、そして周辺環境を含めた空間構造は下野薬師寺を中心に形成・維持そして継承され、現在の薬師寺地域はこのような仏教寺院のみならず、その関連施設や民家、田畑、平地林など、歴史的な重層性が現れた独特の景観を形成してきたといえる。さらに寺院とその関連施設等の祭礼や伝統行事など、民俗・文化的にも下野薬師寺との関係を礎として発展、維持、継承されてきたことで、豊かな歴史的風致が形成されたといえる。



薬師寺地域にみる歴史的風致



## コラム

**下野薬師寺ボランティアの会**

平成13年(2001)に下野薬師寺跡のガイダンス施設「下野薬師寺歴史館」が開館し、現在も活動するボランティア団体の前身団体が発足した。下野薬師寺跡の解説や史跡地の清掃等を行うなど下野薬師寺跡及びその周辺の維持管理活動を担っている。また、最近では下野薬師寺跡や史跡地の解説だけでなく、自主学習した内容を互いに発表する学習会の開催や、市立薬師寺小学校におけるふるさと体験学習の補助などを行っている。

**下野薬師寺跡史跡まつり**

下野薬師寺跡ふるさと歴史の広場には、紅梅と白梅が約100本植樹されている。この梅の開花時期にあわせ例年3月上旬に、史跡に対する理解促進のために、史跡まつりを開催しており、毎年多くの人で賑わっている。史跡まつりは平成18年度(2006)から実施しているが、企画・運営にあたっては、下野薬師寺歴史館とボランティア団体が協力して実施している。

**地蔵山の環境保全**

地蔵山は林内にお地蔵様があることが名前の由来である平地林で、下野薬師寺の中世の墓地跡地である。面積は0.83haで、三味場と呼ばれる大きな農業用ため池が隣接していることから、多種多様な生き物や植物が存在する。この豊かな自然を子どもたちの学習の場や市民の安らぎの場所とすべく、地元ボランティア団体が定期的に保全活動を行っている。

**土塁跡**

薬師寺の西側南北に約50mの土塁が現存する。この土塁は中世のものと考えられているが、寺の伽藍に関わるものか、または中世城館等として利用されたのかなど遺構としての詳細は不明であるが、歴史的環境を構成する一部となっており、現在まで隣接する平地林とともに里山ともいえる地元住民の生活空間として機能している。

**やしきがみ  
屋敷神**

薬師寺地域では、屋敷及び屋敷に続く畑や山林、水田に祀られる神を「ウジガミ」と呼んでいる。各戸で祀られ、祭神は稲荷が多くみられる。かつてはワラホウデンと呼ばれる藁製の祠で祀る家がほとんどであったが、時代の変化とともに木製や石製の祠に変化した。ウジガミのうち主屋あるいは井戸や外便所、蔵といった付属屋に祀る神をやしながみやないがみという。



### 祇園原の松林

現在のJR自治医大駅から石橋消防署付近には松林が分布する。この地域は祇園原と呼ばれるが、祇園原という地名は、この地に祇園社（八坂神社）が所在していたことに由来するとされており、発掘調査によると下古館遺跡は、祇園社の宿・門前市であったと想定されている。その後、祇園原の住民が薬師寺周辺に移住し、祇園社も移されたが、祇園という名が地名に残り、薬師寺とのつながりをうかがわせるものとなっている。



祇園原の東に地蔵山と呼ばれる松林が三昧場に隣接している。この地蔵山は『今昔物語集』にその記事がみられる。五輪塔の破片が確認されており、中世にはこの土地が墓地として利用され、現世と来世の境界といった性格の空間として周辺の人々に認識されていたと考えられている。

祇園原の松林は、近世初期以降の秋田藩の佐竹氏が管理していた御林が起源である。天和元年（1681）作成とされる「薬師寺村外九ヶ村申出図」では薬師寺ノ内御立林と記されている。また、詳細年代は不明であるが近世の様子を描いたと考えられる「薬師寺村絵図」には、領主への役銭（使用料）を納めることで林野の立入・草刈などが許される場所を表す運上野うんじょうのという表現で、周辺の村持、谷館野、諏訪山とともに祇園原運上野と記されている。また、同じく近世の様子を描いたとされる「薬師寺村御林並御固場絵図」では、祇園原は御林として記されているほか、いくつかの絵画資料において新御林や寛政期以降の国産奨励政策として松を中心に杉・檜・檜などを植林した産物御林といった表記がされている。その他に、日光街道整備として設けられた松並木もみられる。

現在、祇園原の松林は自治医科大学の敷地内にも広がっており、敷地内の松林は大学開学以降も、大学によって維持管理され、良好な環境を保っている。

また、平成19年（2007）頃、グリムの館イルミネーションを行う市民団体である下野市ウインター活性化推進協議会が、地域の活性化のために下野市名木30選を選定し、祇園原の松林はその名木30選のひとつに選ばれている。さらに、平成25年（2013）3月27日には、下野市の知名度の向上と地域経済の発展、3町合併後の市としての一体感形成を目的として策定された下野ブランド推進プランによって作られた下野ブランドに祇園原の松林が認定されており、現在も地域住民によって祇園原の松林の継承、保全活動が行われている。

### 自治医科大学薬師祭くすし

自治医科大学の薬師祭は、平成30年（2018）で第47回目を迎える大学設立当初から開催されてきた学園祭である。学園祭の名前は医師の古語である薬師にちなんで名付けられたものである。

自治医科大学付属病院の場所は、祇園社と呼ばれる字名が残る地域で、かつては薬師寺八幡宮に鎮座する八坂神社がこの地に所在していたことが発掘調査や近世の絵図から分かっている。また、八坂神社は祇園信仰にゆかりのある薬師如来と関わりがあり、「薬師」という言葉は大学にとってゆかりのある言葉といえる。

毎年10月上旬の3日間、自治医科大学キャンパス内にて盛大に行われ、学生が主体となり、模擬店や展示企画、医療体験の場、著名人の講演会など様々な企画を催しており、幅広い年齢層が大学を訪れている。